

切り絵 優しく鮮やかに

山谷「ほしのいえ作業所」

山谷の元野宿者や生活困窮者が通う「ほしのいえ作業所」（荒川区に、切り絵や短歌を作り続けてきた男性がいる。静岡県出身の村上喜代志さん48）。統合失調症で生活保護を受けながら作業場に通ったが、6月に精巣がんが見つかり、現在は自宅で闘病生活を送っている。ほしのいえ代表の中村訓子さん（75）は、村上さんの作品を作業所内で大切に預かっており「作品は村上君が生きている証し。多くの人に見てほしい」と話している。

【市川明代】



切り絵作品を手にする村上喜代志さん（左）と「ほしのいえ」の中村訓子代表（荒川区で）

幼い頃に両親が離婚し、児童養護施設で育った。人間関係を築くのが苦手で、建設現場など住み込みの仕事を転々とした。8年ほど前、失業して杉並区で野宿をしていた時に、支援団体を通じて中村さんと出会った。精神障害者保健福祉手帳を取得して生活保護を受け、都内で1人暮らしをするうちに作品を作るようになった。

村上さんがんと闘いながら創作

「切り絵は子どもや女性、地元を走る都電荒川線などがモチーフで、水性ペンで色を付け、鮮やかな作品に仕上げている。短歌は「夢に出てきた言葉や、夜中にふと目覚めたときに頭に浮かんだ言葉を組み合わせ作っている」という。星空の下に集まる子猫たち 狙う獲物は 希望の未来 村上さんは感情をうまく表現できず、何度も中村さんとぶつかった。中村さんは村上さんを骨に受け止め、「心に良い影響を及ぼすのでは」と作品作りも応援してきた。2014年には切り絵作品の一つが全国精神保健福祉会連合会のカレンダーにも採用された。

がんはリンパ節に転移しており、医師から手術は困難だと告げられた。現在は自宅で訪問看護サービスを受けているが、村上さんは「障害があっても、こういう作品を作れるんだと、みんなに理解してほしい」と語る。

中村さんは「村上君の作品には、困難の中に生きてきた彼の優しさかじりみ出ている。大切にしたい」と話している。作品は作業所内で見る事ができる。